

養成施設における給食管理実習の概要と給食施設での 栄養士業務との差異について

About difference with summary of lunch management training
In training facility and dietitian duties in lunch facility

高橋 孝太
Kota Takahashi

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 人間生活科学専攻 修士課程

キーワード：給食経営管理，栄養士，教育

Key words : Lunch management, Dietitian, Education

1. 研究目的

現在、栄養士養成施設の卒業生の多くは卒業後、給食施設にて勤務している。養成施設においても給食管理の授業や実習、または校外実習など、給食に関する様々なカリキュラムが実施されている。

しかし、実際に給食施設に勤務した経験から、学生として授業で学んだことや知りえる情報と、実際の仕事との間に大きな隔たりがあると感じた。

栄養士の高い離職率の一因として、教育と実際の現場での業務との間の隔たりがあるのではないかと考え、それを埋めることが、現在の栄養士を取り巻く環境を改善する一手になると考えられる。隔たりを埋めるには、現在の養成施設における給食管理について、どのような教育が行われているか把握・整理し、合わせて、給食施設に勤務する栄養士を取り巻く環境(現状)を把握し、教育と実際の現場との差異を明らかにすることで、その差を近づける方法を検討することが可能となる。

また、栄養士の職場環境を把握することで、栄養士に求められる能力を知ること、給食管理に関わる授業のシラバスの改定などによる教育の質の向上につながるとも考えられ、その結果、学生のスキルの向上、栄養士のスキルの向上にもつながると考えられる。

さらに、養成施設における教育課程はその性質上、栄養士の業務内容を広く浅く学習させるものになっているが、実際の現場での栄養士業務はそ

の施設の種類に応じた専門的なものであるため、隔たりがあっても当然であるとも考えられる。

しかし、現在の教育内容が本当に栄養士の業務内容を広く学習できるものになっているのか調査し、そこに違いが見られた場合、教育内容を現在の栄養士の一般的な業務内容に近づけることにより、より実際の現場に近い学習をすることができることになり、卒業後に給食施設に勤めた際に感じる違いや差を減らすことで、離職率が軽減されるといったことに繋がると考えられる。

そこで本調査では、養成施設での給食実習の内容(実習生数、食数、設備、日程など)と給食委託会社または給食施設における栄養士・管理栄養士の勤務環境や内容、食数、などを調査・検討し、教育と現場との差異を明らかにし、両者の距離を近づける方法を検討することを目的とした。

2. 研究実施内容

養成施設・給食施設それぞれに対して調査票を作成し、実態調査を行った。

質問項目は、実際に養成施設と給食施設の両方に勤務した経験から、差を感じたもの、もしくは差があると考えられるものという観点から以下のように作成した。

まず、養成施設に対してのみのものが、養成種別、学校種別、定員、実習学生数、実習頻度、担当教員数、実習の実施時期。

給食施設に対してのみのものが運営種別、施設種別、作業員数、食種数、提供回数、養成施設への要望。

共通のものが提供食数, 提供方法, 配膳方法, タイムスケジュール, 設置機器, 温度管理, 衛生手袋の使用方法, アルコールスプレーの使用方法, 非加熱食材の提供方法, 給食管理業務の担当者, 業務ごとの給食管理ソフトの使用の有無とした。

調査は, 養成施設は全国 358 校のうち, その約 14% に当たる東京, 神奈川, 千葉, 埼玉に設置されている 51 校の 64 コースを対象とし, 給食施設では, 給食委託会社 3 社と協力依頼の取れた施設を対象に行った。

調査依頼は郵送, メール, もしくは直接お会いして行い, その返送をもって同意していただいたと判断した。

回答数は, 養成施設が 33 件, 給食施設が 257 件であった。

なお, 本調査は大妻女子大学生命科学研究倫理委員会の承認を受け行った。

現在, その内容を集計し, 統計処理ソフト spss にて解析を行っている。

解析は, 養成施設, 給食施設それぞれの質問項目間の相関関係の調査と, 各質問項目ごとにクロス集計を行い, X^2 検定にて養成一現場間の差を検討している。

3. まとめと今後の課題

今後は統計処理を進め, 解析終了後, 差の見られた項目を精査し, その原因や問題点を考察していく。

その際, 現場, 教育双方の経験があることから, 独自の視点で考察できると考えている。

しかし, 一方でどちらかに偏った考察にならないように注意しなければならないことが課題の 1 つであると考えられる。

その考察において問題ありと判断し, なおかつ養成施設において改善が可能であると考えられる項目に対して, 実習内容の改善案を考え, その内容を踏まえたシラバス案を作成したいと考えている。

そのシラバスの効果を実際の実習を通して検証することが今後の課題である。